

真鍋さんの言葉からー日本の研究環境

松浦 俊博

真鍋さんのノーベル物理学賞受賞の新聞記事を読んだ。地球温暖化の予測法を開発したそうだ。こういうテーマもノーベル賞の対象になるのかと思った。現在世界中でCO₂削減が叫ばれているので、このテーマが脚光を浴びたのだろう。素粒子物理分野で広く貢献した南部陽一郎のような天才ではなさそうだ。

真鍋さんの、日本を米国と比較した言葉が気になった。「日本では人々は常にお互いの心を煩わせまいと気につけ、調和のとれた関係を保つ。米国では他人がどう感じているか、それほど気にしなくていい。科学者は研究でやりたいことを何でもできる」

十七年ほど前に、息子は日本の大学院で宇宙物理の大御所S教授に指導を受けたが、教授が扱ったテーマの延長的な研究を薦められた。それは将来性がないと悩んだ末、カナダの研究所に拠点を移した。その後、研究分野を変えて欧米の研究所を渡り歩いた。「日本は研究者の移動が少ないので発想が澱んでしまい、刺激のある新しいことができなくなる」と話していた。欧米では、研究者は一所に居座らず、場所を変えて他の研究者たちと活発に交流することにより刺激を受け発想を広げる。当然、世界中の研究者との交流も盛んになり、学会には世界から仲間が集まる。日本でも、研究をリードする人たちの多くは、欧米の複数の研究所で研究に従事した経験があり、世界中に仲間を持つ。

日本も世界の拠点の一つになれないだろうか。真鍋さんが言う日本人の気質が障害になるならば、研究と社会生活を分け、研究は調和に囚われず自由にやることはできるだろう。それには研究者の意識を変える必要があるかもしれない。時々外国の研究所に移動させ、そこで仕事をさせれば、発想は広がるだろう。欧米のサバティカル（在外研究）のようなシステムでもいい。対応できない研究者は淘汰される。また複数の拠点に在籍するのもいい方法かもしれない。息子もカナダを本拠にしているが、日本の理研にも在籍している。

研究者にとって居心地の良い拠点作りを日本人全員で支援していききたいものだ。日本は「調和を重んじる」居心地のいい国なのだから。